

・桜望子（山形県）

人をまだ

諦めないでいる

油彩絵の具で汚す服

たとえば絵の具で服を汚すように、人間関係にはなかつたことにはできない、後戻りできない地点がある。それは怖ろしくも、他者を信じることから始まる。

・白野（新潟県）

看護婦が見せる笑顔のぜんぶ襷

遠くの痛みをひろい上げては

いたわりの、慰めの、思いやりの微笑み。その表情にあらわれる皺のみなもとを辿ってゆけば、そのぜんぶが精神的な身体的な痛みに繋がるはずだと。

・源楓香（東京都）

少子化を止めたい街で、

ひび割れた唇たちをもてあそぶ雪

くちびるの乾きはどこから来るのか。子どもを産めない、産まないこの街でひび割れたくちびるを愛撫する無数のくちびるを雪と呼ぶのかもしれない。

・小林紅石（埼玉県）

さよならのらが聞こえない走馬灯

走る馬の灯。その疾駆する速さでめぐる生涯の記憶の断片。さよなら。大切な人

たちの声の最後の息が聞こえないうちにせっかちな馬は駆け去ってゆく。

・あお（奈良県）

うずまきのはじまりに立つ

悩むのは悩む力があると言われて

悩みの入り口に立つ私をなぜか他者は励ましてくる。悩む力があるらしい私はそのうずまきに足を踏み入れなければならぬだろうか。

・田崎森太（東京都）

みなみかぜ胸に緑の導火線

みなみかぜが吹き渡る胸にうまれる寄る辺のないざわめき。それはとりとめもなく私を破滅へ誘う。導火線のその先に繋がる予感を期待しながら。

・六月（埼玉県）

君と僕で

頭のアンテナを折る

7月の夜

頭のアンテナを互に折ることで世界を、そして互いを冷静に認知できなくなる。正しく認知できなくなることこそが愛することのはじまりになる。

・真島しましま（千葉県）

これは神話なので

楽器としてはそぐわない僕も

風をこすれば、

神話はなんでもありだ。矛でかきまわすことで国が産まれるのだから、風をこすっているうちに私はやがて音楽にだってなりえる。

・立花ぼとん（東京都）

穀雨

アナウサギを原種とする家畜

一般的にペットとして買われているカイウサギ（飼兎）は「アナウサギを原種とする家畜」である。その長い耳に遠く懐かしくひびく雨の音。

・豊岡 若菜（北海道）

ミルフィーユみたいなの

手紙を解体し

天気のことなど書いてみるだけ

何枚も重なり繊細で脆い感情の様相を見せる手紙。いちど解体してみれば、もう二度と積み上げることのできない言葉がある。残るのはただ時候の挨拶のみ。